

## 聖フィリッポ教会

### ガウディに共感した日本人建築家が建てたカトリック教会

長崎県長崎市の聖フィリッポ教会は、アントニオ・ガウディを日本に紹介した研究者で、その手法を実践した建築家・今井兼次の設計。1962（昭和37）年に竣工し、ガウディを彷彿とさせる陶片モザイクの2本の塔を特徴とする。長崎市の景観重要建造物。DOCOMOMO選定。



長崎市西坂に建つ聖フィリッポ教会。高さ約16mの双塔をガウディ作品を思わせる陶片モザイク「フェニックス・モザイク」が彩る。



①静かな聖堂内に十字架やハトの形のステンドグラスから外光が差し込む。木組みの天井には双塔につながる開口部が見られる。聖歌は天井に反響し、降り注ぐように聞こえるという。②十字架を囲む装飾は聖母マリアのマントをイメージしたもの。③聖堂とエントランスを結ぶ階段は2つ。こちらは神父が使う。

長崎市西坂地区は、豊臣秀吉によるキリスト教禁制下の1597（慶長元）年に宣教師や信徒など26人が処刑された殉教の地。彼らはアジアで最初のキリスト教の殉教者であり、イエス同様に十字架にかけられたことから、当時、ヨーロッパでも大きく注目された。1862（文久2）年、26人はローマ教皇によって聖人に列せられ、その約100年後にあたる1962年に聖フィリッポ教会と日本二十六聖人記念館が今井兼次の設計で建てられた。聖フィリッポ教会を特徴付けるのは、コンクリートの表面に陶片モザイクをちりばめた

双塔。これはガウディ作品に通じる手法で、今井はガウディの造形やキリスト教信仰の精神性に共感し、自らの建築に取り込もうと試みた。2人はともに敬虔なキリスト教徒であった。モザイクには、26人が連行された京都～長崎間の窯元で焼かれた陶器や陶片が、典礼色を中心に用いられている。聖母マリアを象徴する左の塔では、白色を基調に赤や緑、黒などの色を組み合わせ、右の塔では殉教者を表す赤色のモザイクを塔頂に配し、避雷針に聖霊のシンボル・ハトが天から降る姿をあしらっている。

双塔の直線的ではない複雑なフォルムや陶片モザイクは、図面だけで現場の職人たちに制作させるのが困難であったため、今井は粘土模型を作って対応したという。聖堂内は小ぶりながらも厳かな雰囲気漂う空間。天から下降するハトや十字架を象った窓を、カトリック教会では珍しい幾何学模様のステンドグラスが彩っている。今井は26の十字架と永遠の神を表すA・Ωを刻んだ祭壇、彫刻を施した木製扉などもデザインした。教会は今も大切に受け継がれ、日本語や英語によるミサが行われている。



彫刻家・舟越保武作のレリーフをはめ込んだ日本二十六聖人殉教記念碑（手前）と、日本二十六聖人記念館（左奥）。



陶片モザイクが美しい塔頂。その上部に①聖母マリアを象徴する王冠③聖霊を表すハトの装飾を頂く。②④塔身にはラテン語で祈りの言葉が書かれている。

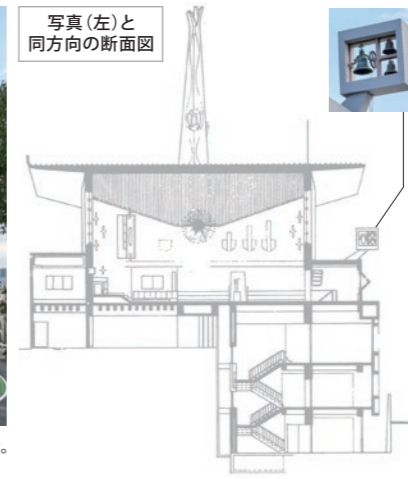
陶片の他に皿や碗などの陶器も使われている。



今井と教え子の大学生が作った双塔の粘土模型。



緩やかな坂の途中に建つ聖フィリッポ教会。左手奥に入口がある。



写真（左）と同方向の断面図

#### 用語説明

【聖フィリッポ】二十六聖人の一人で、唯一のメキシコ人。フェリペ（フィリッポ）・デ・ヘスス。

【アントニオ・ガウディ】スペインの建築家。曲線・曲面の多用と多彩な装飾を特色とする幻想的作風で知られる。

【フェニックス・モザイク】不要になった陶片や陶器を用いて製作したモザイク。今井による命名。

【今井兼次】早稲田大学建築学科卒業。地下鉄と近代建築の研究視察で訪欧した際、A.ガウディの建築に出会う。静子夫人とともにカトリックの信徒。

【聖人】キリスト教で、偉大な殉教者や信徒の尊称。

【典礼色】キリスト教の教会層に沿って祭服や祭具などに用いられる決まった色。色ごとに意味がある。

長崎県長崎市西坂町7-8  
協力：日本二十六聖人記念館

